

## 保育士による保育内容（環境）の自己評価の分析

An analysis of self-evaluation on the area of “Environment”  
recognized by nursery teachers

清水 益治・千葉 武夫

### 問題と目的

本年（2009年）4月1日から、新しい保育所保育指針が施行された。この新指針の「第4章 保育の計画及び評価」の中には、「保育所は、保育の計画に基づいて保育し、保育の内容の評価及びこれに基づく改善に努め、保育の質の向上を図るとともに、その社会的責任を果たさなければならない。」という記述がある。さらにこの章には、「2 保育の内容等の自己評価」として、「保育士等の自己評価」と「保育所の自己評価」に対する記述がある。これらの記述は、保育所における保育士による自己評価の必要性を指摘するものである。

国立情報学研究所の論文情報データベースであるCiNiiで「保育」「自己評価」をキーワードに検索すると、134本の論文が検索された（平成21年9月22日現在）。最も古い論文は1959年であり（西本, 1959）、50年も前から保育士（当時、保母）の自己評価については論文があった。しかしそれらを眺めてみると、多くが保育所における実習生の自己評価に関するものであり、現職の保育者による自己評価に関する論文はほとんどなかった。ただし数は少ないながらも、本研究に直接関係するものもあるので、以下ではそれを概説する。

岩立ら（1997）は保育者による重要度の評定に基づいて、3歳未満児用保育の質尺度として、保育者自身が自己評価を行うための質問紙を作成した。この質問紙を用いて岩立ら（1998）は、公私立差、地域差、保育者の年齢差を調べ、保育の環境・条件では公私立園の差、保育者の関係と保育姿勢では地域差、個別的保育プログラム、親の保育参加援助、保育環境では保育者の年齢による違いが顕著であることを示した。民秋らは、一連の調査に基づいて、第三者評価に関する児童福祉施設等評価基準検討委員会の報告書（同, 2002）に対応した保育士用の自己評価チェックリストを作成した（民秋, 2003; 2004）。我々はこの尺度を用いて、園の設置主体、保育士の性、主任かどうか、担任かどうか、勤務形態、経験年数による違いを報告し、研修システムを提案してきた（千葉ら, 2005; 佐藤ら, 2005; 川喜田ら, 2006; 清水ら, 2006; 清水・千葉, 2006）。我々が提案するシステムは、様々な属性による自己評価結果の違いを比べ合い、お互いにより点を見習うシステムや、保育士の養成教育と現任教育をつなげるシステムを含むものである。しかしながら残念なことに、これら一連の調査研究は、旧保育所保育指針に基づくものである。

ところで、冒頭に述べた新指針の施行は、保育士の業務に大きな影響を及ぼす。これまでの保育所保育指針は通知レベルであったのに対して、新指針は告示レベルである。法的拘束力がでてきたのである。そのため保育士は指針に記載されている実施義務の内容については、必ず実施しなければならない。また努力義務の内容についても、実施に努める必要がある。新指針をもとに保育を組み立てなければならないのである。本研究では、この新指針に基づく自己評価チェックリスト（民秋, 2008）の作成過程の資料を分析することで、保育士の現任教育に役立つ資料を提供する。

本研究で主任と主任以外の比較に焦点をあてたのは、次の二つの理由による。その一つは、著者らが全国社会福祉協議会・全国保育士会が主催する主任保育士特別講座にたずさわっているからである。この講座は、保育所および地域における保育のリーダーとしての主任保育士のより高度な専門性と指導性を確立するために、①保育内容の質的充実をはかること、②保育のリーダーとしての力量を高めること、③保育のスーパーバイザーとしての知識・技術を磨くこと、④地域社会における子育て支援の役割を充実させることを目的として系統的に毎年実施されている。我々はこの講座にゼミ指導講師等としてたずさわりの、マンスリーレポートや修了論文の指導にあっている。この指導の中で著者らが共通に感じたことは、主任の特徴が明確になれば、指導もしやすくなり、講座の成果も上がるであろうということであった。本研究で提供する資料は、この講座の目的を達成するのにも役立つことが期待される。

もう一つの理由は、主任という立場が「保育所運営の中心的役割を担う」、「保育所運営の要」などと称され、主任保育士を対象とした研修会が様々な地域で開かれているにもかかわらず、その役割が非常に包括的で、明確化されていないからである。研修会は、例えば i-kosodate.net にも「保育士のための生涯教育」として研修セミナーの計画が示されているが、業務（〇〇担当者）を除き、立場によって対象を限定している研修は、保育所長と主任のみである。このことは保育所長と同様に、主任が保育所にとって重要な役割を担っていることを示唆している。しかしながら所長は管理運営者であり、子どもや保護者と実際に接する機会はあまりないと考えると、主任には、日常業務のすべてを掌握し、勤務する保育士を育成し、かつ当該保育所の将来の方向を定めるという仕事のすべてが任されることになる。小規模な保育所・保育園なら可能かもしれないが、その規模が大きい場合には、主任以外の協力がなければ、いわゆる「要」もその役割を果たし得ない。そこで本研究では、主任と主任以外の保育士と比較して、主任の特長を明確にしようとした。

保育内容（環境）に焦点をあてた理由は2つある。その1つは、新指針になり、保育内容の「ねらい」や「内容」が大綱化されたからである。旧保育所保育指針で保育内容は、発達過程区分ごとに、その「ねらい」と「内容」が明示され、特に「内容」については領域ごとに記述されていた。しかし告示化と共に新指針では、発達過程区分ごとの記述はなくなった。発達過程区分ごとのねらいや内容は、各保育所が保育課程として独自に編成する保育の計画にゆだねられたのである。ここで主任の役割が大きくなる。多くの保育所では主任が保育課程を編成する役割を担う。そのため新指針について主任はより深く学ぶ必要がある。本研究では、この違いを調べる。もう1つの理由は、著者らが保育士養成カリキュラムで保育内容の授業を担当しているからである。特に著者は本年度より保育内容（環境）の授業を担当している。そのため本研究の結果を授業や現任教育に直接反映できる。

本研究の目的は、保育内容（環境）に焦点をあてて、主任と主任以外の自己評価を比較することで、現任教育に資する資料を得ることである。なお従来の我々の研究では、チェックリストの各項目に「はい」と答えた割合の違いだけを比較したが、本研究では因子分析を行い、捉え方の違いについても検討した。

## 方 法

**調査対象** 全国域で58カ所の保育所に協力を頂いた。その内訳は公立保育所が40カ所、私立保育所が18カ所である。各保育所におおむね30票の調査票を送付した。配布総数は1780票であった。

回収された調査票は1713票。このうち記入されたものは1331票であった。残り382票は無記入であったが、これらは一括で送付された調査票のうち、小規模園等の事由で職員数が30名に満たないために返却された票である。回収率（ $[1780 - 382] \div 1331 \times 100$ ）は95.2%であった。

**材料** A票とB票の2種類からなる調査票を作成した。A票はフェイスシートに当たるもので、①勤務する園の所在地、②勤務する園の設置主体、③所持している免許・資格、④主任かどうか、⑤クラス担任かどうか、⑥就業形態、⑦通算保育所勤務年数、⑧性別、⑨過去1年間に受けた外部研修の回数を尋ねる9項目で構成した。本研究の主な関心である④については、「あなたは主任ですか。」と問いかけ、「1. 主任 2. 主任以外 3. 園長」の選択肢を用意した。

B票は自己評価チェックリストの本体であった。扉には、「保育士のための自己評価チェックリスト」記入上の注意として、①保育園の体制がどうかという視点ではなく、回答者自身が、日頃、どのように保育しているかについて聞いていること、②質問への回答は、すべて「はい」と「いいえ」の2つからどちらかを選ぶものであり、「はい」か「いいえ」のどちらを選ぶか迷った場合も、必ず一つを選ぶこと、③乳児保育などの事業の場合は、現在「担当している」か、または「過去に担当したことがある」者のみが答えることを強調した。

チェックリストは300の項目で構成されていた。本研究の主な関心である保育内容（環境）については、表1の第2欄に示す16項目で構成した。これらの項目は、新保育所保育指針（平成20年3月告示、同21年4月施行）にて示された「保育の内容」に対応づけて改訂されたものであった。

なおこれらの調査票の他に、依頼状が作成された。この文書には「「保育士のための自己評価チェックリスト」作成に関する調査のお願い」として、①編纂委員会代表の挨拶や調査の趣旨、②編纂委員会のメンバーの氏名や所属・職位などと共に、調査方法として、③調査対象が当該園の全保育士（30名以内）であることおよび当該園で保育士が30名以内の場合の配布の仕方（乳児・幼児の担当、保育士・主任・園長、常勤・非常勤、年齢、経験年数などさまざまな条件の方々が含まれるようにすること）、④回収、返送の仕方（調査票は配布枚数把握のため、小規模園等で未使用のものもすべて返却してほしいこと）、⑤調査結果は統計的に処理し、個別名をあげての集計や報告はしないこと、調査にご協力いただいた方に迷惑をかけないことなどが書かれていた。

**手続き** 調査は平成20年7月から8月にかけて実施された。公立保育所には当該保育所を設置する自治体の保育課などを、私立保育所には編纂委員会のメンバーを通じて、調査依頼がなされた。調査票等の発送は平成20年7月25日に某出版社が行った。回収は、期日を同年8月18日とし、各保育所が、回収した調査票を、当該保育所が小規模等のため未使用のものを含めて（「配布枚数把握のため」として依頼状に明記して依頼）、一括してその出版社に返送した。

## 結 果

**分析対象** 回収された有効調査票1331票の内訳を公私立保育所別に見ると、公立保育所の保育士が765票、私立保育所の保育士が547票、無回答が19票であった。本研究の主たる関心である主任かどうかの別に見ると、主任が159票、主任以外が1047票、園長が65票、無回答が60票であった。クラス担任かどうかの別に見ると、クラス担任が971票、担任以外が328票、無回答が32票であった。就業形態別に見ると、常勤が970票、非常勤（フルタイム）が197票、非常勤（短時間）が148票、無回答が16票であった。これらの値を見ると、本調査は、全国調査としてほぼ妥当な分布であると考えられる。

**承認率** 表1は、保育内容（環境）に関する調査項目で「はい」が選ばれた割合（以下、承認率）について、全体の承認率、主任の承認率、主任以外の承認率、主任と主任以外の差、およびその差のカイ自乗検定の結果を、全体の承認率が高い順にを示したものである。全体の承認率が最も高かったのは、「その日の天候・気象に合わせた保育をしていますか（97.0%）」であった。「その日の天候や気象」は、毎日容易に確認できる。また、例えば雨が降れば外遊びではなく、室内遊びに切り替えるなど、天候や気象に応じて保育を容易に変えることができる。そのためこの項目は意識がしやすいのであろう。

続いて、「心の安らぎや、豊かな感情を体験できるように、子どもと自然との触れあいを大切にしていますか（95.6%）」「身近な自然をとうして、その美しさ、不思議さなどに気づくことができるようにしていますか（94.5%）」「自分のもの、他人のもの、共同のものに気づけるような機会を提供していますか（92.3%）」「水や砂や土などを使って、その性質や仕組みにあった遊びを展開できるように工夫していますか（90.0%）」と、これらは90%以上の承認率であった。これらの項目は、「大切にする」「気づくことができるようにする」など、結果がすぐに現れると

表1 承認率とその検定結果（%）

NO	項目	承認率			差(主任－主任以外)	差の検定結果
		全体	主任	主任以外		
82	その日の天候・気象に合わせた保育をしていますか	97.0	100.0	97.0	3.0	*
80	心の安らぎや、豊かな感情を体験できるように、子どもと自然との触れあいを大切にしていますか	95.6	98.1	94.8	3.3	
79	身近な自然をとうして、その美しさ、不思議さなどに気づくことができるようにしていますか	94.5	97.5	93.6	3.9	
88	自分のもの、他人のもの、共同のものに気づけるような機会を提供していますか	92.3	96.2	91.4	4.8	*
81	水や砂や土などを使って、その性質や仕組みにあった遊びを展開できるように工夫していますか	90.0	94.3	89.2	5.1	
86	子どもが身近な動植物の世話をするなかで、生命の尊さに気づくよう話かけていますか	89.0	96.9	87.1	9.8	**
83	身近な動植物を飼育・栽培するなど、それらに興味・関心をもつことのできるよう配慮していますか	86.3	95.0	83.7	11.2	**
87	園庭や散歩で集めてきた葉や木の実など、季節感のある素材を保育のなかで活用していますか	83.1	93.7	80.5	13.3	**
84	身近な自然事象に触れ「どうして」や「なぜ」といった疑問に対して、一緒に調べたり考えたりしていますか	82.2	93.7	79.5	14.2	**
85	子どもが身近な動植物に自分からさわろうとする時に、何に一番気をつけなければいけないか、いつも考えていますか	82.2	90.6	80.2	10.4	**
89	集めてきた木の実を数えたり、数量や図形などに関心を持つよう工夫していますか	76.7	93.7	73.0	20.7	**
90	身の回りにある簡単な標識や文字に関心を持ち、その意味や役割がわかるよう配慮していますか	72.7	91.2	68.9	22.3	**
93	あなたは、社会の出来事について、子どもに分かりやすく説明できますか	64.7	86.0	59.7	26.3	**
91	地域の公共機関を利用するなど、近隣の生活に興味を持てるように配慮していますか	59.3	73.4	55.6	17.8	**
92	園外保育などで地域で働いている人たちに出会う機会をつくっていますか	58.4	73.4	55.4	18.0	**
94	さまざまな国の旗を作って飾ることによって、いろいろな国に興味・関心をもてるようにしていますか	23.0	36.9	19.6	17.4	**

\* p<.05、\*\* p<.01

は限らない。しかしながら日々意識することは可能である。多くの保育士は、これらの内容を日々意識して保育を実施していることがうかがえる。

反対に、承認率が最も低かったのは、「さまざまな国の旗を作って飾ることによって、いろいろな国に興味・関心がもてるようにしていますか (23.0%)」であった。4人中3人の保育士がこの項目には「いいえ」と答えていた。国の旗を作ったり、飾ったりする機会は少ないと言える。

続いて、「園外保育などで地域で働いている人たちに出会う機会をつくっていますか (58.4%)」「地域の公共機関を利用するなど、近隣の生活に興味を持てるように配慮していますか (59.3%)」「あなたは、社会の出来事について、子どもに分かりやすく説明できますか (64.7%)」と、これらは67%以下の承認率であった。3人中2人の保育士が「いいえ」と答えていたことになる。指針がかわり、園外保育のねらいや方法を検討する必要ができたと言えよう。

主任と主任以外の比較では、先ず差の検定結果の列を見ていこう。16項目中、有意差がなかったのは3項目だけであった。これら3項目は90%以上の承認率に偏っている。また有意さの水準が5%出会った項目も90%以上の承認率である。これらの項目は、主任であるかどうかにかかわらず、すべての保育士が意識するので、天井効果として差が出にくかったと考えられる。

次に差（主任－主任以外）の欄を見てみよう。すべての項目で、差の値は正であった。すなわち、すべての項目で主任の方が主任以外よりも承認率が高かった。主任の方が保育内容を保育所保育指針に記されている内容を意識して保育をしていると言えよう。

次に差が大きかった項目に注目した。最も差が大きかった項目は「あなたは、社会の出来事について、子どもに分かりやすく説明できますか」であり、26.3ポイントの差が見られた。また、子どもに分かりやすく説明する技能は、主任になるために必要な技能の1つであると考えられる。続いて「身の回りにある簡単な標識や文字に関心を持ち、その意味や役割がわかるよう配慮していますか」が22.3ポイント、「集めてきた木の実を数えたり、数量や図形などに関心を持つよう工夫していますか」が20.7ポイントと続いていた。これらの配慮や工夫も主任として意識すべき内容であると言えよう。

**因子分析** 主任と主任以外の別に、因子分析を行った。表2に示すように「その日の天候・気象に合わせた保育をしていますか」という項目では主任の承認率が100%で、分散がなかったため、この分析からは省いた。主任の選択について、因子数を決めるために主成分分析を行ったところ、固有値1.0以上の基準では5因子が妥当であることが明らかになった。そこで5因子を指定して、因子分析を行ったところ、表3の左のような因子が抽出された。0.4以上の負荷量のセルには、色をつけて示している。

第1因子は、「身近な自然をとうして、その美しさ、不思議さなどに気づくことができるようにしていますか」「心の安らぎや、豊かな感情を体験できるように、子どもと自然との触れあいを大切にしていますか」「園庭や散歩で集めてきた葉や木の実など、季節感のある素材を保育のなかで活用していますか」で負荷量が高く、「自然の活用」因子と命名した。第2因子は、「地域の公共機関を利用するなど、近隣の生活に興味を持てるように配慮していますか」と「あなたは、社会の出来事について、子どもに分かりやすく説明できますか」で負荷量が高く、「社会へのかかわり」因子と命名した。第3因子は、「身近な動植物を飼育・栽培するなど、それらに興味・関心をもつことのできるよう配慮していますか」「身近な自然事象に触れ「どうして」や「なぜ」といった疑問に対して、一緒に調べたり考えたりしていますか」「子どもが身近な動植物に自分からさわろうとする時に、何に一番気をつけなければいけないか、いつも考えていますか」「子どもが身近な動植物の世話をするなかで、生命の尊さに気づくよう話かけていますか」で負荷量

が高く、「身近な動植物」の因子と命名した。第4因子は、「自分のもの、他人のもの、共同のもの」の区別に気づけるような機会を提供していますか」「集めてきた木の実を数えたり、数量や図形などに関心を持つよう工夫していますか」「身の回りにある簡単な標識や文字に関心を持ち、その意味や役割がわかるよう配慮していますか」で負荷量が高く、「概念獲得」の因子と命名した。第5因子は「園外保育などで地域で働いている人たちに出会う機会をつくっていますか」で負荷量が高く、「地域の人」の因子と命名した。

次に主任以外に対して同じ分析を行った。すなわち「その日の天候・気象に合わせた保育をしていますか」の項目を除き、主成分分析を行い、固有値1.0の基準で因子数を決め、その因子数を指定して因子分析を行った。その結果、因子数は3であり、表3の右の因子が抽出された。

第1因子は「身の回りにある簡単な標識や文字に関心を持ち、その意味や役割がわかるよう配慮していますか」「地域の公共機関を利用するなど、近隣の生活に興味を持てるように配慮して

表2 因子分析の結果

NO	項目	主任					主任以外		
		自然の活用	社会へのかかわり	身近な動植物	概念獲得	地域の労働	機会提供	感情と気づき	自然遊び
79	身近な自然をとうして、その美しさ、不思議さなどに気づくことができるようになっていますか	0.835	0.062	0.289	-0.055	0.030	0.144	0.794	0.019
80	心の安らぎや、豊かな感情を体験できるように、子どもと自然との触れあいを大切にしていますか	0.832	0.085	0.042	-0.011	-0.071	-0.045	0.738	0.262
81	水や砂や土などを使って、その性質や仕組みにあった遊びを展開できるように工夫していますか	0.326	0.200	0.243	0.197	0.313	0.043	0.198	0.578
83	身近な動植物を飼育・栽培するなど、それらに興味・関心をもつことのできるよう配慮していますか	0.114	0.070	0.697	0.169	-0.228	0.133	0.037	0.713
84	身近な自然事象に触れ「どうして」や「なぜ」といった疑問に対して、一緒に調べたり考えたりしていますか	0.105	0.157	0.744	0.085	0.092	0.261	0.240	0.583
85	子どもが身近な動植物に自分からさわろうとする時に、何に一番気をつけなければいけないか、いつも考えていますか	0.059	-0.061	0.663	0.047	0.442	0.337	0.349	0.201
86	子どもが身近な動植物の世話をするなかで、生命の尊さに気づくよう話かけていますか	0.397	-0.034	0.680	-0.087	-0.015	0.114	0.149	0.683
87	園庭や散歩で集めてきた葉や木の実など、季節感のある素材を保育のなかで活用していますか	0.777	-0.022	0.061	0.390	0.162	0.321	0.243	0.519
88	自分のもの、他人のもの、共同のもの」の区別に気づけるような機会を提供していますか	-0.016	-0.005	-0.034	0.874	0.103	0.216	0.488	0.198
89	集めてきた木の実を数えたり、数量や図形などに関心を持つよう工夫していますか	0.410	0.010	0.496	0.508	0.022	0.451	0.216	0.460
90	身の回りにある簡単な標識や文字に関心を持ち、その意味や役割がわかるよう配慮していますか	0.244	0.170	0.321	0.629	0.183	0.583	0.168	0.340
91	地域の公共機関を利用するなど、近隣の生活に興味を持てるように配慮していますか	0.141	0.777	-0.052	0.242	0.241	0.649	0.009	0.306
92	園外保育などで地域で働いている人たちに出会う機会をつくっていますか	0.037	0.162	0.025	0.152	0.846	0.650	0.116	0.126
93	あなたは、社会の出来事について、子どもに分かりやすく説明できますか	-0.020	0.858	0.101	-0.121	0.008	0.542	0.065	0.256
94	さまざまな国の旗を作って飾ることによって、いろいろな国に興味・関心がもてるようになっていますか	0.094	0.378	0.149	0.369	-0.238	0.669	0.063	-0.087
	説明済み分散	2.543	1.623	2.475	1.891	1.261	2.515	1.812	2.575
	寄与率	0.170	0.108	0.165	0.126	0.084	0.168	0.121	0.172

いますか」「園外保育などで地域で働いている人たちに出会う機会をつくっていますか」「あなたは、社会の出来事について、子どもに分かりやすく説明できますか」「さまざまな国の旗を作って飾ることによって、いろいろな国に興味・関心がもてるようにしていますか」で負荷量が高く、「機会提供」の因子と命名した。第2因子は「身近な自然をとうして、その美しさ、不思議さなどに気づくことができるようにしていますか」「心の安らぎや、豊かな感情を体験できるように、子どもと自然との触れあいを大切にしていますか」「自分のもの、他人のもの、共同のものに区別に気づけるような機会を提供していますか」で負荷量が高く、「感情と気づき」の因子と命名した。第3因子は「水や砂や土などを使って、その性質や仕組みにあった遊びを展開できるように工夫していますか」「身近な動植物を飼育・栽培するなど、それらに興味・関心をもつことのできるよう配慮していますか」「身近な自然事象に触れ「どうして」や「なぜ」といった疑問に対して、一緒に調べたり考えたりしていますか」「子どもが身近な動植物の世話をするなかで、生命の尊さに気づくよう話かけていますか」「園庭や散歩で集めてきた葉や木の実など、季節感のある素材を保育のなかで活用していますか」で負荷量が高く、「自然遊び」の因子と命名した。

## 考 察

本研究の目的は、保育内容（環境）に焦点をあてて、主任と主任以外の自己評価を比較することで、現任教育に資する資料を得ることであった。新指針に対応した保育内容のチェックリストを用いて調査した結果、次の2つの結果を得た。①主任の方が主任以外よりも承認率が高かった。②主任と主任以外では抽出される因子が異なっていた。

主任の方が承認率が高かったことは、新指針を主任の方がよりよく理解していたことを示すものであり、驚くべきものではない。本研究で用いた調査方法は、各保育所に調査票を依頼して記入してもらっているため、主任と主任以外は同じ保育所に所属している。そのため展開している保育は共通である。同じ保育をしても、指針を意識していたかどうかがこのような結果の違いとなって現れたのであろう。

興味深いのは、因子分析の結果である。因子数は、主任の方が主任以外よりも多かった。このことは、主任の方が主任以外よりも、各項目に対して独立した形で認知をしていることを示唆している。言い換えれば、主任以外は、いくつかの項目をまとめた形で認知していることを示唆している。因子のまとまりを比べると、主任の因子からは、保育のねらいや子どもに身につけさせたい心情などのまとまりが感じられ、主任以外の因子からは、保育の方法によるまとまりがうかがえる。このような因子の違いは、主任と主任以外では保育の捉え方が全く異なることを推測させる。

本研究の結果は、現任教育に次の3つのように利用できる。まず一般的な園内研修では、当該保育所の保育と新指針の記述との関係を考えてもらうことが必要であろう。新指針を意識しているのが主任だけでは、「保育の質の向上を図るとともに、その社会的責任を果たす」ことは困難である。自園の保育の特徴を、新指針を踏まえて全保育士が語れるようになって初めて、新指針に基づいた保育が展開できる。このことだけでも、承認率は変化して行くであろう。

2つめとしては、主任が主任以外のモデルとなり、保育に対する考え方や自己評価の基準を伝えていくことが大切となろう。自己評価チェックリストで「はい」と答えるか「いいえ」と答えるかは、一人一人の保育士にかかっている。あまくつけてしまう保育士もいるかもしれない。厳しすぎる保育士もいるであろう。しかしながら少なくとも保育所内では統一した付け方が必要で

ある。この統一した基準を主任の基準とするのである。このためには、主任が保育に対する考え方や自己評価の基準を、日々の保育の中で伝えていくことがよい。本研究の結果は、この伝達が、保育の方法ではなく、ねらいを意識した関わりにつながることを示唆している。

最後は、著者らが行っている主任を対象とした講座で、本研究の結果を伝えていくことである。主任と主任以外の違いがわかれば、主任らはどのように主任以外を導けばよいのかの指針を得ることができる。またそのように導くための工夫も生まれる。本研究は、主任が主任以外を証拠に基づいて育てる最初のステップに位置づけられる。

本稿を閉じるにあたり、本研究結果の応用について述べたい。現任教育の前に養成教育がある。保育所実習など学生が保育現場に出る際には、指導案を書く機会がある。その指導案で展開する保育と、指針の関係を意識していくとどうであろうか。指針を常に意識した保育を学生時代から強いるのである。このようにして養成された者は、実際に保育士になった時点で、指針を意識した保育をする習慣ができていく。この習慣があれば、就職した先の保育所の保育の特徴を指針を踏まえて語れるようになる。主任以外の者が主任に近づく最初のステップを学生時代に終わらせるのである。養成教育が、保育の質の向上や、保育所としての社会的責任を果たすことに資する時代が来るかもしれない。

## 引用文献

- 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子 1997 保育者の評価に基づく保育の質尺度. 保育学研究, 35 (2), 272-279.
- 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子 1998 「3歳未満児用保育の質尺度案1997」による公私立差・地域差・保母の年齢差の検討. 保育学研究, 36 (2), 219-225.
- 児童福祉施設等評価基準検討委員会 2002 児童福祉施設における福祉サービスの第三者評価基準等に関する報告書. 厚生労働省.
- 川喜田昌代・清水益治・民秋言・千葉武夫・佐藤直之・西村重稀 2006 保育者による保育内容の自己評価に関する研究. 白梅学園大学・短期大学紀要, 42, 1-11.
- 西本 修 1959 保育者の自己評価について. 樟蔭家政学, 10, 65-81.
- 佐藤直之・清水益治・民秋言・千葉武夫 2005 現職保育士による保育内容の自己評価に関する研究：経験年数別にみた「受容」に関する自己評価の違い. 京都女子大学発達教育学部紀要, 1, 13-19.
- 清水益治・千葉武夫 2006 主任保育士による保育サービスの自己評価—初任者、非主任、主任保育士による自己評価の違い— 神戸女子大学文学部紀要, 39, 161-170.
- 清水益治・千葉武夫・西村重稀・民秋言・佐藤直之 2006 保育士の資質向上のためのシステム作り—保育士の自己点検・自己評価チェックリストをもとに. 保育士養成研究, 23, 11-20.
- 民秋言 2003 平成14年度財団法人こども未来財団 児童環境づくり等総合調査研究事業「保育内容の自己評価」のためのチェックリストの見直しに関する研究 研究報告書.
- 民秋言 2004 保育士のための自己評価チェックリスト. 萌文書林.
- 民秋言 2008 保育士のための自己評価チェックリスト. 萌文書林.
- 千葉武夫・清水益治・佐藤直之 2005 制度変革期における保育士の資質向上のためのシステム作り—保育士の自己点検・自己評価のチェックリストをもとに. 財団法人明治安田こころの健康財団2004年度研究助成論文集, 175-184.